

〔書評〕村上陽一郎編『現代科学論の名著』

(中公新書・一九八九年)

松田伸子

編者村上陽一郎氏ほか六人の論者がそれぞれの意志で選択した「科学論の名著」十二編をおの紹介・概説した十二章から成る本書は、さりながら、このような構成を取る本にとかくありがちな、単なる寄せ集めに墮落することを見事に免れている。編者が序文で提示するクライテリアに貫かれて全体が一つの流れとなり、終章「広重徹『科学の社会史』」へと首尾よく流れ込んでゆくのである。

氏が予め用意するクライテリアは明快である。一般に「科学」という概念そのものが曖昧である現状に対して、氏はまず第一に、本書においての「科学」、あるいは「科学思想」の定義を明確にする。(science)という言葉が、本来の「知識一般の探求」という意味の厚みを持たなくなる時期、すなわち「科学」という新たな概念の完全な成立時期を、村上氏は十九世紀の後半としている。そして、当然のことながら、

その「科学」をめぐる「科学思想」は、それ以降に成立したものを限定的に指すのであり、ニュートンもデカルトも、本書には出番がない。論じられた「名著」の中で古いものが、ウイトゲンシュタインの『論理学的論考』(一九二二)であり、ホワイトヘッドの『科学と近代世界』(一九二五)なのである。

続いて第二には、そういった限定にかなう「科学論」の中でも、「知識のコンパートメントの壁を壊して、知識の前線の組み換えや、構造の変革に寄与するところのあったもの」(序文)でなければならぬという条件がさらにつけ加えられてゆく。採録された「名著」はそれぞれにこういった基準を満たしていると言えるだろう。しかし中でも、近代科学の礎を成す哲学的原理をその根底から批判することによって、新たなコスモロジーの模索を促したホワイトヘッドの『科学と

近代世界』は、とりわけその代表格と言ってよい。それが本書の第一章を飾っているのもむろん偶然ではないのだ。

このようにして、ホワイトヘッドの『科学と近代世界』から始まる本書が、非西欧世界に生まれ、育ち、仕事をした広重徹の『科学の社会史』で締めくくられることに奇異の感を抱かれる向きもあろうかと思う。しかし、日本が行なった欧米の科学技術の移入は、実のところ十九世紀後半に世界的規模で繰り広げられた科学の制度化の一環であったと看破する広重のパーспекティヴは、本書で紹介される「名著」の意義を理解する上での一つの重要な鍵となるのである。その終章を読み終えた時、それまでに紹介された「名著」の名著たる所以に改めてはつきりと得心がゆくことであらう。